

清姫の戀 (六卷)

脚色者 帝キネ小阪映畫
總指揮者 上島 景氏
監督者 中川 紫朗氏
攝影者 長尾 史録氏
河上 勇喜氏

主要役割

眞鶴の富豪庄司 嵐 璃 徳氏
妻 在原 玉路嬢
娘 清姫 潮 みどり嬢
市川百々之助氏

修験者 安珍

(略筋) 奥州の若僧安珍は熊野參詣の途次、日高川で蛇に驚き河中に落ちた清姫を救つたのが縁で、姫の父たる豪農庄司から厚く歓迎された。其後毎年安珍は熊野詣での途次必ず庄司家に宿泊する事となり清姫への土産物も忘れなかつた。數年後、清姫は戀を知る年頃となり秘かに安珍に想ひを寄せる様になつた。然し道心堅固な安珍は清姫の戀を受け入れなかつた。場へ兼ねた清姫は安珍の寢室に忍び込み切ない胸を打ち明けた。これを立聞いた庄司夫婦は娘可愛さに安珍に還俗して娘の婿養子たるべく望んだ。安珍は返事に窮し熊野參詣の後回答するまで翌朝庄司家を出發した。安珍は熟考の末、佛門に入つた身と思ひ此懇請を拒絶する決心を固め、庄司家に立寄り雷雨の中を日高川を渡り道成寺へ向つた。この事を知つた清姫は狂亂し大雷雨をも屈せず日高川を蛇の如く渡り道成寺へ來り安珍を探したが彼は落雷の爲に氣を失つて居た。狂亂の清姫は失心した安珍と共に入水して果て、終つた。後に道成寺にこのつたのは清姫の帯と安珍の荷物と謎の一尾の蛇であつたといふ。所作事の「道成寺」や歌舞伎劇の「日高川」で知られて居る安珍清姫の傳説を寫實に扱つたものであるが蛇に絡る怪奇的な氣分が薄いので興味の點で損である。然し全體としては落ちついた中に濃艶さと緊張味を出し得て居る好き譚りである。長尾史録氏の監督は無難さいひ得やうが、ラストはもう少し神秘的であつて欲しかつた。雷雨の場面はトリックさ思への上出來で撮影技巧と共に監督方面も成功して居る。百々之助氏の安珍と潮みどり嬢の清姫は若い美しさで得をして居るし、且熱心を探る。嵐璃徳氏の庄司其他は御苦勞であつた。撮影技巧の見事さが此映畫をかなり價値づけて居る事を重ねて特記する。(第百六十六號寫眞掲載)

(七月十九日 大阪寶達劇場) 山本 綠葉